

「主の山に備えあり」  
創世記 22 章 1-14 節

本日与えられた御言葉は、旧約聖書の中でも最も衝撃的な場面の一つ、「イサクの奉献」です。物語は、アブラハムが約束の子イサクを授かり、人生の平穩を満喫していた時期に始まります。神は突如として、「あなたの愛する独り子イサクを、焼き尽くす献げ物としてささげよ」と命じられました。これはあまりにも残酷で、かつ「イサクによって子孫を繁栄させる」という神ご自身の約束とも矛盾する命令でした。しかし、この試練の本質は神の心変わりではなく、長年アブラハムを導き育ててこられた神による「絶対的な信頼」にありました。「このアブラハムならば、私の愛に応えてくれる」という神の期待が、この過酷な問いには込められていたのです。

アブラハムは抗うことなく、翌朝早くに出発しました。モリヤの山へ向かう「三日間」の道中、神は沈黙を守られます。その間、アブラハムは愛する息子の顔を見るたびに胸を締め付けられるような葛藤と祈りの中にいたはずです。それは、ゲッセマネの園で「御心のままに」と祈られた主イエスの苦しみと重なります。さらに、イサクが自らを焼くための「薪」を背負って山を登る姿は、自らが架けられる「十字架」を背負って歩まれたキリストの姿を予示しています。火と刃を手にしたアブラハムの痛みは、独り子を審判へと渡さざるを得なかった父なる神の痛みそのものだったのです。

道中、イサクの「小羊はどこにいるのですか」という鋭い問いに対し、アブラハムは「神が備えてくださる」と答えます。アブラハムは具体的な解決策を知っていたわけではありません。しかし、彼は「神が必ず責任を取ってくださる。神が約束を違えるはずがない」という神の誠実さを握りしめていました。

アブラハムが刃を振り下ろそうとした瞬間、神の制止の聲がかかり、身代わりの雄羊が備えられました。アブラハムはその場所を「ヤーウエ・イルエ（主は備えてくださる）」と呼びました。ここで私たちは決定的な対比を目にします。神はアブラハムの手は止められました。ご自身の独り子イエスが十字架にかかれたとき、その手は止められませんでした。イエスが「なぜ私をお見捨てになったのですか」と叫ばれたとき、父なる神は沈黙し、あえて救いの手を引かれました。それは、イエスこそが私たちの罪の身代わりとして「備えられた小羊」だったからです。

「主の山に備えあり」という告白は、安易な楽観論ではありません。沈黙と絶望の中を歩み抜いた先で受け取る約束です。私たちが人生の重い薪を背負い、神の沈黙に苦しむときも、神は私たちを見捨てておられません。アブラハムが登ったモリヤの山は、後にエルサレム神殿が立ち、その傍らで主が十字架にかかれた場所です。神は歴史を貫いて、私たちの救いをすでに完成させてくださいました。この受難節、私たちは十字架という究極の「備え」を与えてくださった神の愛を静かに見上げ、信頼して歩みを進めてまいりましょう。